



コスタリカ国草の根技術協力

「生活改善アプローチによる農村開発モデル事業活動報告」

No. 4

2016.4.21

～先進地見学～

NPO 法人イフパット 研究員 小林沙羅
(現地調整員/生活改善ファシリテーター)

中南米における生活改善分野の農村開発で有名な、AMAGRO というコスタリカの生活改善実践グループがあります。日本で研修を受けた農牧省の職員が、コーヒー生産者である5家族に生活改善を伝えグループ活動が始まってから約5年が経ったそうです。プロジェクトでもファシリテーターである市役所、政府職員達と先進地見学として先日この AMAGRO を訪ねました。AMAGRO では、各メンバーが生活改善を実践してから自分たちの考え方が前向きに変わり、共同作業を通して村全体の生活が変わったことを堂々と語ってくれました。印象的だったのは、生活改善は「私たちの学校」であると表現していたことです。読み書きを学ぶように、保健衛生や栄養、農業の知識を学ぶことで日々の問題を協力しながら解決し、貧しくても何かできることを実感してきたと話していました。農牧省の職員によると、当初は「この村に資源などない、何も出来ない」と語っていたそうです。

最初、オロティナ市のファシリテーター達は AMAGRO のプロセスよりも、現在の結果に目が行ってしまい大きなコーヒー加工機械やバイオガスの施設に驚き、オロティナの対象者は農家ではなく土地もないので出来ないのでは、という反応でした。また、ディスカッションでは、オロティナ市では様々な援助をしてきたが、意識をどのように変え住民のモチベーションを維持すれば良いのかという質問が出ました。AMAGRO のメンバーからは、生活改善は都市であろうと、家庭から始めるものであり可能であると答えを得ました。また、

目的を持った小さなグループを組織化することでお互いの意識を変えていけるという経験も共有されました。AMAGRO の活動を全て真似する必要はない、応用することが重要であり、AMAGRO とは条件が違うがオロティナでも何かしていこうとファシリテータ自身からの意見があり、この日の訪問を終えました。

後日、ファシリテーターの一人から「あれは AMAGRO だから出来た成果であり、自分はオロティナの対象集落の住民を知っている。そのうち物がもらえないとわかったら、皆去っていく。」と確信を持って言われてしまい落ち込んだところでした。それを変えるためにプロジェクトがあり、働きかけているわけですが、自分自身がもう少し効果的に AMAGRO のプロセスを見せることが出来たのではないかという反省と、ファシリテーター自身がそう信じている間は住民の変化を促すには程遠いことを実感しました。一方で、AMAGRO を訪問し子どもたちが生活改善に参加し小さい時から意識を変えていったのを見てから、ファシリテーターは、女性だけではなく家族全体の参加を重視するようになりオロティナでも子ども達が良く活動に参加してくれるようになりました。

懸念をよそに、対象集落では第三回目のワークショップが開かれほぼ同じ顔ぶれの 10 名の女性達とその子どもたちの 3 名が集まりました。このワークショップでは、もう一度生活改善はお金を配るプロジェクトではなく、女性たち自身が日常生活の中の課題を解決していくことであることを確認し、地域資源活用の話もしました。その中で資源は自然資源などだけではなく女性たち自身であることを伝えるため、” En que soy bueno ” という参加者が自分自身の得意なことをグループで発表し合う作業をしました。彼女たちの得意分野としては、料理をすること、主婦として家事をすること、絵を描くことが挙げられ簡単な劇を通して自分たちの能力を紹介していました。その様子は自信に満ちていて、「自分達でも何か出来る」という気持ちに少しでも繋がったのではないかと思います。AMAGRO だから出来たのか、オロティナを初め他の地域でも出来るのか、村の女性達とファシリテーター自身の変化にかかっています。



子ども達は得意な絵を発表。「自分たちの村」を描いてくれました。



風船を使った手法を使いチームワークを高めます。グループの中にもかなり関係性が出来てきたように感じています。



自分達がどんなに美味しい料理を作れるかを演じながら、他のグループに説明しています。包丁さばきの良さに拍手喝采が起きました。



心理学専門のファシリテーターの提案により、お互いの信頼関係を高めるためいろいろな形のハグをするアイスブレイキングもしました。